

正大四十一年十二月五日

新報

(一) 第六號

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(十)

(十一)

(十二)

(十三)

(十四)

(十五)

(十六)

(十七)

(十八)

(十九)

(二十)

(二十一)

(二十二)

(二十三)

(二十四)

(二十五)

(二十六)

(二十七)

(二十八)

(二十九)

(三十)

(三十一)

(三十二)

(三十三)

(三十四)

(三十五)

(三十六)

(三十七)

(三十八)

(三十九)

(四十)

(四十一)

(四十二)

(四十三)

(四十四)

(四十五)

(四十六)

(四十七)

(四十八)

(四十九)

(五十)

(五十一)

(五十二)

(五十三)

(五十四)

(五十五)

(五十六)

(五十七)

(五十八)

(五十九)

(六十)

(六十一)

(六十二)

(六十三)

(六十四)

(六十五)

(六十六)

(六十七)

(六十八)

(六十九)

(七十)

(七十一)

(七十二)

(七十三)

(七十四)

(七十五)

(七十六)

(七十七)

(七十八)

(七十九)

(八十)

(八十一)

(八十二)

(八十三)

(八十四)

(八十五)

(八十六)

(八十七)

(八十八)

(八十九)

(九十)

(九十一)

(九十二)

(九十三)

(九十四)

(九十五)

(九十六)

(九十七)

(九十八)

(九十九)

(一百)

(一百零一)

(一百零二)

(一百零三)

(一百零四)

(一百零五)

(一百零六)

(一百零七)

(一百零八)

(一百零九)

(一百一十)

(一百一十一)

(一百一十二)

(一百一十三)

(一百一十四)

(一百一十五)

(一百一十六)

(一百一十七)

(一百一十八)

(一百一十九)

(一百二十)

(一百二十一)

(一百二十二)

(一百二十三)

(一百二十四)

(一百二十五)

(一百二十六)

(一百二十七)

(一百二十八)

(一百二十九)

(一百三十)

(一百三十一)

(一百三十二)

(一百三十三)

(一百三十四)

(一百三十五)

(一百三十六)

(一百三十七)

(一百三十八)

(一百三十九)

(一百四十)

(一百四十一)

(一百四十二)

(一百四十三)

(一百四十四)

(一百四十五)

(一百四十六)

(一百四十七)

(一百四十八)

(一百四十九)

(一百五十)

(一百五十一)

(一百五十二)

(一百五十三)

(一百五十四)

(一百五十五)

(一百五十六)

(一百五十七)

(一百五十八)

(一百五十九)

(一百六十)

(一百六十一)

(一百六十二)

(一百六十三)

(一百六十四)

(一百六十五)

(一百六十六)

(一百六十七)

(一百六十八)

(一百六十九)

(一百七十)

(一百七十一)

(一百七十二)

(一百七十三)

(一百七十四)

(一百七十五)

(一百七十六)

(一百七十七)

(一百七十八)

(一百七十九)

(一百八十)

(一百八十一)

(一百八十二)

(一百八十三)

(一百八十四)

(一百八十五)

(一百八十六)

(一百八十七)

(一百八十八)

(一百八十九)

(一百九十)

(一百九十一)

(一百九十二)

(一百九十三)

(一百九十四)

(一百九十五)

(一百九十六)

(一百九十七)

(一百九十八)

(一百九十九)

(一百二十)

(一百二十一)

(一百二十二)

(一百二十三)

(一百二十四)

(一百二十五)

(一百二十六)

(一百二十七)

(一百二十八)

(一百二十九)

(一百三十)

(一百三十一)

(一百三十二)

(一百三十三)

(一百三十四)

(一百三十五)

(一百三十六)

(一百三十七)

(一百三十八)

(一百三十九)

(一百四十)

(一百四十一)

(一百四十二)

(一百四十三)

(一百四十四)

(一百四十五)

(一百四十六)

(一百四十七)

(一百四十八)

(一百四十九)

(一百五十)

(一百五十一)

(一百五十二)

(一百五十三)

城鄉時事研究

△磐城の實業大和田  
與平△磐城經濟新報  
鈴木正雄、野矢安孝  
△磐城商工時報渡邊  
源吉、久野真宏△磐  
城立憲新報小泉宗雄  
△平新報山野邊庄吉  
『寫眞説明』 塙所  
平町谷口樓參階、  
鶴の間、向つて右  
より谷口仲居コマ  
野矢、玉川のウサ  
子、山野邊、渡邊  
谷口喜多勇、大和  
田、林家文子、鈴  
木、久野、小泉、  
『平町田町ライト』  
寫此



でやむなく官選臨時村長交代理のやむなきに至つた。しかしの如く官選となしたる名選村長を置いた事あるがそれは後任村長を選舉したるが事情ありて認可がなかつたためであつたが鹿島村のはそれと異り選舉會も開かず、助役までの席を空にして退きたる前村長鈴木氏の進退は村治を思はざるものにて事男らしくないと村民の非難の的となつて居る村長代理吉田正義氏に望むらくは須く何人を村長に村會にて推すも一日も早く選舉會を開くべきであらふと鹿島一般村民は希望して居るが今の所村議拾二名中荒川氏を推すもの七名佐藤氏を推すもの五名らしい尙ほリ村議折衝の結果本月中に吉田代理村長は村會を召集する事を聲明した。

自治体を失せる  
鹿島村々政  
村治上黨争をやめて  
急據村長選舉會を

島村長は前村長鈴木聰次（鈴木前村長は再び任につく）  
氏が去る十一月二十八日  
の意志あり然らざれば同派  
以つて満期につき同日吉  
正義氏官選臨時村長代理  
命せられ居るが事此處に  
る迄の經過を仄聞するに  
一方消防組頭の  
忠治氏（を推さんとし又  
るも村議の大半は荒川  
の鈴木大藏氏を推さんとす  
事となつたが前村長は突然  
續け二十六日に選舉をなす  
村議は二派に別れて運動を  
事となつたが前村長は突然  
無期延期をなして了つた、  
此處に於て村議有志は助役  
蘭部市之助氏をして選舉會  
を開かせしめんとした時既  
に同助役は數日前辭職願を  
出して出勤もせず居つたの  
の兩佐藤が出でんとしたが  
佐藤萬太郎氏は中途荒川忠  
治氏を推す側となり此處に

仁例の片岡醫院  
目下小名濱町竹町居住東河郡松川村八ガ窪に籍を  
する佐川マサ(三丈)は病留太(三二)に對し數年間商を營みながら看護しつ  
あつたがその効なく留太病死したがその貞情に感  
同女の隣近のものは勿論  
より醫師片岡醫院では無にて治療しつゝあつた由  
てマツ女の貞心と片岡懲長の仁俠には人心の輕薄

金成	山野邊文	師齋	平町南町	伊勢屋商	平町四丁目
			飯野村長		
	上田外 科醫	電 話			
	電話一二一	六二			

磐城海岸軌道會社	電話五〇七番	平日 紅屋町
支配人丹野寛平		
内科眼科 小兒科		
片岡醫院		
小名濱町西町		
長瀬金右衛門	銘玉の井	湯本町
小名濱町信用組合	醸造元	藝妓屋組合
立花雄七	長瀬半島福島縣石城郡王川村	新引秀
小名濱町	郎五	
可會議員	酒	
電 漫五二番		

村議折衝の結果本月中に田代理村長は村會を召集する事を聲明したと

元組頭	鈴木 常次郎
鈴	木
遠	藤 安
齊	藤 義
高	雄 喜
萩	義 雄
儀	平

五日正義日は現  
らくは須く何人を村長に  
會にて推すも一日も早く  
舉會を開くべきであらふ  
鹿島一般村民は希望して  
るが今の所村議拾二名中  
川氏を推すもの七名佐藤

小名濱	白銀	合	合	合
壽滿家のミド	元	医	院	院
	元	医	院	院
	元	医	院	院
	元	医	院	院
五 才	黑	佐	波	志
	荒	門	藤	登
	木	馬	立	登
	川	要	米	正
	美	源	次	正
顯	重	郎	次	松
村	村	村	村	村
居	居	居	居	居
荒	荒	荒	荒	荒
氏	氏	氏	氏	氏

吉例によりてマルトモの大特賣  
新年ゑはがき、  
年賀文字ハガキ  
カレンダー、カルタ  
運勢暦、カルタ  
トランプ、クリ  
スマスカード  
常用日記類

---

柴田書店

平町四丁目  
電話二三四番

ためであつたが鹿島村のそれと異り選舉會も開かれて、助役までの席を空にしてきたる前村長鈴木氏の進は村治を思はざるものに事男らしくないと村民の難の的となつて居る村長

東京は龜井戸の高島家に居  
つたツバメ(14)の瓜實の妓  
に代つて貰ひます皆さん相  
變らず四六四九ネだとサ

植田町常磐工業株式會社  
常務取締役 小野庄一 新藤加

理のやむなきに至つたばかりの如く官選となしたのは自治村として恥とせねらぬかつては玉川村に選村長を置いた事あるがは後任村長を選舉したる事情ありて認可がなかつた

して居る尙マサ女に對し小  
名濱町長は表彰するらしい  
物いふ平 玉勇(15)來  
花便り 正月より壹

▲谷口の半

本となつて 壱

新妻贊雄

元消防組頭

臨時村長代理

平 町二丁目	50 瓦入	25 瓦入	10 瓦入	100 錠入
西 村 屋 藥 局	金壹圓拾錢	金六拾錢	金卅錢	金壹圓
チユール	凍傷(シモヤケ)新治療剤	100錠入	10瓦入	50瓦入
フアトシン錠				